

氏名・(本籍地) 三浦大輔(宮城県)

学位の種類 博士(文学)

学位記の番号 甲第81号

学位授与の日付 平成23年3月15日

学位論文題目 内田魯庵研究

論文審査委員 主査 千葉真郎

副査 大場 朗

副査 関井光男

三浦大輔氏 学位請求論文審査報告書

「内田魯庵研究」

論文の内容の要旨

本論文は、日本近代を代表する文筆家・内田魯庵（不知庵）の文業を追求し、文学という一領域から社会・文明批評の域に至った過程及びその性質と特徴とを明らかにしたものである。序論・本論・結論の三部から構成され、本論は第一章が文壇登場までの経緯、第二章が『女学雑誌』時代、第三章が『国民新聞』時代から『文学一斑』まで、第四章が日清戦争前後の文壇、第五章が魯庵の小説、第六章が丸善・『学燈』時代及び第七章が後期批評家時代、と文筆活動の主な区切りごとに括っている。

まず第一章では文筆活動を明らかにするため、基盤となる伝記検証をしている。前半の「生い立ち」では魯庵自身の自筆回想を精査し、実母の死去に伴う父親の放蕩という少年時代の生活環境が後年の文学態度に〈ピューリタニック〉に投影していると指摘。後半の就学状況の吟味では学籍簿や当時の学校制度などの傍証資料を可能な限り駆使し、従来の伝記研究の曖昧さを質し、日本古典文学の受容とやがて英文学に傾倒する経緯とを併せて指摘している。文筆活動の全体像にひとつの道筋を付けたことになる。

第二章では文壇デビュー作となった批評「山田美妙大人の小説」の掲載経緯と執筆態度とに触れ、逍遙『小説神髓』の影響下にあったことを指摘。次いで初期作品評群を吟味し、魯庵の批評眼が当代評言の援用から、次第に作者の創作理念「意匠」や「精神」を問題にするよう展開したと指摘。この展開が魯庵を本格的な文芸批評家たらしめ、やがて独自の批評規範「風姿」「風情」論に及んだことを論証。ただし「風姿」(文章)

偏重の誇りは免れないと批判的な見識を示し、当時の魯庵批評の限界をも併せ論じている。この論証は先行研究を遙かに凌ぐ内容になっている。

第三章では国民新聞社への入退社の経緯を検証した上で、魯庵文学の真骨頂ともいべき文学理論書『文学一斑』の精査に及び、魯庵批評の進歩変遷を論じている。同時に当代評の膨大な資料を使いこなし、当代状況との絡みをもつ諸論争をも吟味している。

第四章では硯友社系の人情小説に代わって登場した娯楽本位の軽佻浮薄な作風に対峙する魯庵批評を検証する一方、日清戦争後の観念小説の流行に対して「文学の本質的な価値という観点」及び「熱狂的な機運」への反発から苦言を呈する批評態度を分析している。ここには横山源之助の記事が引例されていて論述に重みを与えている。また新たに活動する翻訳物や評伝『ジョンソン』等に焦点を当てている。

第五章では今日でも評価が別れている処女小説「くれの廿八日」を中心に論証している。とりわけ関連する批評「朝茶の子」と「嚼氷冷語」を吟味しながら、作中に見られる「衝突」と脆弱な当代文学状況への反発とに論者が注目している。この観点は魯庵理解の新基軸となる。

第六章では丸善における活動の意義と社会・文明批評の特徴とを検証し、シリーズ物の「書斎の窓より」を通じて世界の潮流であったデモクラシーへの言及に着目している。本章における検証箇所はこれまでの先行研究で蔑ろにされていた項目である。

総じて日本近代文学のパイオニアとしての位置付け「戯作者意識からの脱却」と、文学の領域を超える文

業への評価「明治から大正という（中略）新時代を担う知識人の形成に与した」点とが併せて論証されている。

審査結果の要旨

本論文の目指したものは、内田魯庵の全文業の精査・検証である。魯庵が頻繁に使う「社会」すなわち時代思潮との絡みで文業を捉え、それを多岐にわたる回想録及び膨大な傍証資料をもって裏付けるという実証的方法がとられている。論者が長年にわたって収集した資料の整理と再構築とが結晶したといえる。

論文全体としては第一章で文業の道筋を付け、第二・三・四章で文芸批評家としての足跡を吟味し、第五・六章で小説家及び社会・文明批評家としての位置付けを論証している。魯庵の文業に関して、これまで明治二十、三十年代の批評活動だけが脚光を浴び、その後の活動についてはごく限られた研究者の他には明らかにしようとする者もいなかった。論者は全文業を視野にいて、読者・市民・国民の啓蒙と発展という魯庵に一貫する観点を見出している。

例えば早々に触れている創作理念「意匠」の提言は何故か、代表作『文学一斑』は誰に向かったの発言か、さまざまな論争への介入意味は何か、等々を踏まえて後年の活動を位置付けている。論者の論証態度も一貫している。明らかに先行研究を凌ぐ内容となっている。

とは言え、全く問題がないわけではない。

入手可能な資料を駆使して就学時の年時を検証していることは、確かに先行研究を上回る。だが前後の脈絡を見出し難い。例えば東京大学法学・理学・文学部進学系統の予備門本費に十六、十七年度に在籍していること自体、その後の進路は決定されている時代である。しかも当時はエリート官僚の主流が理学・工学系出身の〈天下熱〉から、法学・文学部系の体制内での出世願望〈立身熱〉に代わっていた。このことは自著『思い出す人々』『明治の文学の開拓者』等に詳しく、魯庵自らが何の〈アンビシャス〉をも持ち合わせていなかったことを併せて表白している内容である。この表れが度重なる学校遍歴であろうし、また、〈文学熱〉にうなされた謂であろう。魯庵文業の基幹ともいべき箇所、人間魯庵を抜きにしては論じられない項目である。さまざまな文業の背景、つまり人間魯庵の動向に触れ得ない本論文の一課題である。本論文はより一層の吟味を残したことになる。

だが、こうした問題は今後の研究課題とするものであって、先行研究を凌ぐ本論文の優れた内容を損なうものではない。課程博士論文という将来の可能性を秘

めたものとしては十分である。

審査委員三名は本論文を精読し、口述試問を行ない、その後に審査委員会を開き、慎重に検討を重ねた結果、本論文が課程博士の学位授与に値する内容であるという評価で一致した。その旨を、ここに書面をもって報告する次第である。